

藤本伊三郎先生を偲ぶ 後進への愛情と教育

日本がん疫学研究会 Newscast No. 99 から

津熊 秀明

大阪府立成人病センター がん予防情報センター
在りし日の藤本先生を偲んで、一筆認めさせていただきます。藤本先生は、大阪府立成人病センターの初代調査部長を務められた関悌四郎先生（大阪大学名誉教授 公衆衛生学）のもと、成人病センターの礎を築かれ、昭和46年5月から平成4年3月までの21年の長きに渡り、同・調査部長を務められますとともに、我が国の地域がん登録の設立、発展に大きな貢献をされました。そして地域がん登録を基盤としたがん疫学研究の分野を切り開かれました。藤本先生は、若手の公衆衛生を志す医師、研究者にとって、正に父親のような存在でした。時には親に子が反抗するように、意見が対立することもありましたが、藤本先生は、常に冷静・温和で、慈父の様であり、また、藤本先生と親交のあった優れた人格の方々、これには海外の著名な研究者も含まれますが、若手研究者に積極的に交流する機会を与えて下さいました。こうした親身の指導により、多くの若手研究者を育てて下さったと思います。こうした経験が、自身のあるべき将来像を思い描く糧になった若手研究者も多かったと思います。

藤本先生は、平成4年3月に退職されると、自ら全国の地域がん登録事業の発展を願い、同年12月に地域がん登録全国協議会を設立し、初代理事長に就任されました。当時の末舛恵一国立がんセンター総長や豊島久真男大阪府立成人病センター総長、矢内純吉大阪府衛生部長らのご支援も得て、当時成人病センター調査課長であった故日山與彦先生を事務局長に迎え、無事船出に成功されました。平成7年1月17日に襲った阪神淡路大震災での日山先生の御不幸は、とりわけ私どもには大きな痛手でしたが、同・調査課大阪府がん登録室長の花井彩先生のバックアップもあり、今日の我が国の地域がん登録の基礎を強固にして頂いたと思います。藤本先生には、こうした功績に対し、平

成5年に日本対ガン協会賞、平成7年に高松宮妃癌研究基金学術賞、平成10年に保健文化賞が、それぞれ贈られています。また、我が国だけでなく世界のがん登録事業の発展にも大いに尽くされ、IACR 国際がん登録協議会から名誉会員の称号も受けておられます。

藤本先生は、平成7年9月に解離性腹部大動脈瘤を突如患われ、一時ICUでの絶対安静を強いられることになりました。そうした中、同年10月26日、平山雄先生の訃報に接されます。藤本先生は、平山先生の東京でのご葬儀に自らも出席したいと仰るなど、仁義を大変重んじる方でした。このときの御病気が引き金となり慢性腎不全による血液透析を余儀なくされるなど、先生のその後の活動をかなり制限されることとなり、地域がん登録全国協議会の理事長も大島明先生に託されることとなりました。しかし藤本先生の我が国の地域がん登録への熱い思いはその後も弱まることは全くなく、常に細やかなアドバイスを与えて下さっていました。今年10月に、第32回IACR総会（会長：廣橋説雄国立がんセンター総長）を、地域がん登録全国協議会との共催のもと、横浜で開催することが決まり、国立がんセンター祖父江友孝先生が運営委員長となり準備を進めています。藤本先生は、25年前に開催した福岡での第6回IACR総会の経験を「前車の轍」として、ご不自由なお身体をおして綴って頂いておりました（地域がん登録全国協議会 No 22、2008年2月）。

(右ページに続く)



左より大島明先生、藤本伊三郎先生、花井彩先生
ホームの前庭にて (2009年)

昨年5月には、兵庫県宝塚市にある介護付老人ホームに移り住んでおられた藤本先生が、花井先生、大島先生、今井さん（地域がん登録全国協議会主事として長く協議会事務を担当）と私の4人を招いて下さり、お元気そうな藤本先生にお目にかかれ、楽しいひと時を過ごすことができました（写真はその時のもの）。その際にも、藤本先生が後進の私共に向けて下さっている思いやりの深さに感謝せずにはおられませんでした。

藤本先生のこうした慈愛に満ちたお人柄は、これからも永遠に私どもの心から離れることはないと思います。藤本先生が残された精神は永遠に生き続けると確信します。我が国のがん登録、がん疫学に大きな足跡を残された藤本先生、本当に有難うございました。

賛助団体（2009年2月1日現在 21団体 敬称略、順不同）

(財)日本対がん協会	(財)大阪対ガン協会
明治安田生命保険相互会社	第一生命保険相互会社
アメリカンファミリー生命保険会社	
(財)大同生命厚生事業団	日本生命保険相互会社
第一三共株式会社	アストラゼネカ株式会社
富士レビオ株式会社	大鵬薬品工業株式会社
伏見製薬株式会社	堀井薬品工業株式会社
ワイズ株式会社	シェリング・プラウ株式会社
大塚製薬株式会社	株式会社ヤクルト本社
中外製薬株式会社	ノバルティスファーマ株式会社
グラクソ・スミスクライン株式会社	
サイニクス株式会社	

藤本伊三郎先生を偲ぶ がん登録と歩まれた歳月

花井 彩

地域がん登録全国協議会 顧問

藤本伊三郎先生をお偲びし、本稿ではがん登録分野での先生のご活動の経緯を述べたい。

藤本先生は、1961年、大阪府立成人病センター調査部に調査課長として赴任された。間を置かず、同部（部長は関悌四郎大阪大学公衆衛生学教授が兼務）は、府および府医師会と共に、大阪府悪性新生物患者届出事業を企画、準備し、事業は翌年に発足した。私は先生より半年早く着任していたが、最初は府の事業と同時にスタートした成人病センター所内がん登録を主担した。所内登録がほぼ軌道に乗った頃、藤本先生からお誘いを頂き、大阪府がん登録のチームに参加することになった。藤本先生は終始、得られた登録データの利用こそが事業の命であると考えられ、完璧なデータを待つ間にも、利用可能なデータをもって多方面に活用する道を選ばれた。がん検診の評価など衛生行政への利用、がん疫学への利用、重複がん発生機序の研究、届出医療機関へのデータ還元と病院がん医療の評価、等々の諸

研究と事業の実践を可能としたのは、一つは先生のデータ利用の考え方、二つには重複票を同定する照合作業の自動化を成功させられたことにあったと思う。これにより、がん登録資料を外部データと結合し、外部要因の発がん（がん死亡）リスク評価が容易となった。

当初照合作業には藤本、大島先生、私を含め全課員が参加したが、このノウハウを集め、セミコンピューター化照合システムの完成を見た（大島先生の文章参照）。1981年にDr. Harald Hansluwka（WHOがん統計課長）は、WHOの会議「発展途上国におけるがん統計」日本開催時に、全参加者と本システムを見学、研修された。また平山雄先生（国立がんセンター疫学部長）から、このシステムを、日米がん研究協力事業によるワークショップ「がん疫学における統計手法」（1984年、於広島）で紹介するという要請を受けられた。人口が大きい神奈川県および千葉県のがん登録では、大阪のものをモデルとした照合システムが開発された。

他方、1972～74年、藤本先生は厚生省がん研究助成金による「がん診療機構の現状分析とがん登録を主軸とするその効果的システムの確立に関する